建暦版註十疑論に就いて

小西存祐

一

僕は今回ふとした因縁から、建暦版の註十疑論を發見するに至つた。次に少しく其のことを紹介してみよう。

この古版本は、愛知縣尾張國葉栗郡葉栗村大字大毛の極樂寺といふ寺の藏本で、現住は石井勇光といふ尼僧である。汽車は、東海道線木曾川驛から、東方約二十丁の處に在る尼寺で、その近在では、極樂寺と云ふよりは「天神さんのお寺」といつた方が、遙かに能く解かる。

何ふして僕が、之を發見するに至つたかと云ふと、今歳夏東京で宗寶調査會が開かれた。恰度その少し前、大阪は上本町の菩提庵といふ尼庵に、文治年間に書かれた宗祖の御影が在るといふ事を聞いて、それを觀せて貰ひに出かけた。御影は例の新しいもので、繪としては割合に詰らぬもので有つたが、その際ふとこの極樂寺のことを耳にしたのである。

同庵の尼僧の話に依れば、大毛の極樂寺は宗祖の御遺跡で、現住は同尼とは學校時代の同窓であるとか。同尼は嘗てその寺へ參拜もしたさうで有るが、その時の住職の話に、何んでも長持に一ぱい寶物も在るとか云ふ事を言つてゐたと云ふのである。僕は、何ういふ關係でその寺が、宗祖の御遺跡であるか能く知らなかつたので、改めてその事を問返して見たが、一向要領は得なかつた。兎にかく宗祖の御遺

跡といふ寺に、長持に一ぱいの寶物と云ふので有るから、僕は尠からず好奇心を唆られた譯である。

その後僕は東京からの歸途、偶と車中でこの事を想だして木曾川驛で下車し、大毛の極樂寺へ參拜と出懸けた。天候なり時間なりの都合で、其日は其處で一泊をする事となり、翌日朝から例の長持なるものを調べて見た。けれども期待は全く裏切られて、別に是れぞと注意する程の物は無かつた。

謂はゆる長持に失望した僕は、次いで、何か書物のやうな物は在りませんかと尋ねて見た。斯くて、持ち出されたものが二杯の本箱である。是で全部ですかと質くと爾うだと言ふ。是れはと最初僕は思つたが、序いでだと思つて一々それを選り分けてゆくと、驚く勿れ、その裡から現はれたのがこの建暦版の註十疑論で有つたのである。

二

極樂寺の緣起に關しては、現在卷物が三本傳つてゐる。何れも文政年間に書かれた新しいものでは有るが、一本は「圓光大師御遺蹟再興記」と云つて、伊勢松坂淸光寺の信岡上人の筆に成つてゐる。一本は又た「圓光大師靈像緣起」と題し、大和當麻奥之院の現定上人の記と在る。今一本は「圓光大師舍利記」と云つて、京都押小路專念寺の隆圓上人の記となつてゐる。

今それらの記錄に依ると、尾張風土記の中に「當國葉栗郡若栗の極樂寺は、法然上人三夏不出の繩堂なり」といふ記事が見へてゐる。最初信岡上人が此文を看て不審を懷かれ、色々と取調べられたところ遠州內田村應聲院の記によると、同極樂寺は宗祖が櫻が池へ參拜の途次、立寄られた御遺所だといふ事

が解つた。天文年間、木曾川の洪水に遇つて、堂宇流失し、一時廢絶の姿と爲つてゐたのを、文政の初め信岡上人が、知恩院の門主泰譽在心上人に請ふて今の地（原の位置には今圓光庵てふ尼庵在り）に再興をせられたもので　事はまた上人の自叙傳（淨全略傳集）の内にも見へてゐる。夫れでこの古版の「註十疑論」も、多分さうした關係から信岡上人の手を經て、當山に傳つたものでは無いかと思ふ。上人が文化年中、盛に宗典の校合開板に盡力されたといふ事は、人の能く知る所である。

三

次にこの古版本の體裁について少しく述べて見よう。版本は烏の子紙の粘葉綴で、後世開版の「註十疑論」には、何れも宋の贊寧の序文が附いてゐるが、本書には全くそれが見へぬ。

題號は、卷頭内題に「淨土十疑論」と在り、卷尾に「註十疑論」とあつて、一見前後相違してゐる樣であるが、首題の分は、實は此本の題號ではなくて所註の「十疑論」の夫れなのである。所註の題號を以て能註の夫れを兼ねたのか、或は略したのか、兎も角本書には別に首題といふものは無い。

それから撰號であるが、是も後世の「註十疑論」には天台智者大師說、沙門澄彧註、沙門贊寧序と皆な並べて書いて在るが、此本には全く撰號が無い。

次に字詰その他であるが、本書は每葉片側十七字詰六行と成り、表紙を除けて都べて五十八枚ある。一字下げて書いて在るが「註」で「本文」はどこでも其の註する箇處にくると、其處で語句を切つて行が改めてある。後世の版本には其れを細註にして、ところ〴〵本文の間に狹んで在るが、此本では「註」

も本文も皆な同大の文字が用ひてある。

書體は、彼の室町時代に觀る拙劣なものとは違がつて、寫經風の極めて立派なもので、墨色も頗る佳く、版式もまた整つてゐる。

文章は白文で、本と訓點などは無かつたが、本論の「十疑論」の文だけは、後から墨で返點振假名が施され、又ところ〴〵異本とも校合がしてある。誰の手入れとも解からぬが、或は奥書の圓海では無いかとも思ふ。何にしてもこの訓點も、確かに近代のものではない。

次に刊記であるが、是は尾題の次に「建暦元年辛未七月四日彫始之沙門昌慶」と在る。建暦元年は言ふ迄もなく宗祖御入滅の前年で、例の平氏の序文で見ると、此冬「選擇集」が刊行せられたといふことを言傳へてゐる歳である。それから昌慶であるが、是は何ういふ人か、僕はまだ能く調べてゐない。多分天台宗の人で有らうと思ふ。

次に、裏表紙の内側に奥書が在る「圓海代修補之」と。成程よく檢べて見ると、大分ところ〴〵蟲が入つて裏打がして有り、殊に最後の一枚の如きは、全部表紙の方へ粘付られてある。多分蟲の爲めに本紙から千切れたからなので有らふ。所で其の修補者圓海であるが、是も僕にはまだ能く解らない。年表その他で看ると、同名異人が六七人も在る、筆跡から觀ると、可なり古い人の樣にも有り、又若し訓點の點者でも有れば、或は南北朝頃の人では無いかとも思ふが、果して何んなものであらう。

四

次に異本との對校であるが、現行の十疑論は、先づ藏經系統のものでは、明藏を始め縮刷、卍字、大

正等の諸大藏經が有り、近くは又た淨土宗全書の第六卷にも編入されてゐる。又單行本としては正保版慶安版、康熙版等が有るが、一つも此の建曆版の本文に符合するものは無い。又た「註十疑論」の刊本としては、元祿八年諦全の刊行に係る「首書註十疑論」が在り、又た淨土宗全書に收められてゐる享保版の夫れが在る。享保版は元祿版とは全然同一であるが、今の建曆版とは大分文字の上に相異がある。

要するにこの建曆版は、現行の僕が觀た範圍に於ける十疑論關係のものでは、全然別な系統に屬するものと云ふことになるのであるが、併し僕は材料の蒐集に於て、今一つ充分餘裕を持つてゐなかつたと云ふことを附加へて置く。

五

次にこの「註十疑論」の作者に就いて一言加へて置こう。言ふ迄もなく此書は「十疑論」最古の註書であるが「十疑論」の作者に就いては、或は天台の作と云ひ、或は懷感、或は湛然などゝも云つて、今日まだ一定した定說といふものは無い。併し何づれにしても、天台の眞撰では有るまいといふ事だけは證眞已來多くの學者の認めてゐる所で、現に傳敎大師の將來目錄(延曆廿四年撰)を見ても、他の天台の著作には一々その名前が署名して在るのに、獨り本書にかぎつて其の名前が錄出してい無所を見ると、支那でも當時その頃(唐第九主德宗代卽我延曆廿四年)までは、明らかに本書を以て、大師の著作とは言つてゐなかつた樣である。所が其後七年たつて十一代憲宗皇帝の時に至り、柳子厚の「淨土院記」に、始て天台の著作として傳へられ、爾來宋を經て明に至り、所謂「明藏」に編入されて今日に及んでゐる。

所でこの「註十疑論」は、宋の初め天台の沙門澄彧といふ者の書いたもので、澄彧の傳記は甚だ明瞭

でない。けれども佛祖統紀を見ると、錢唐吳山の人で字を廣敎と云ひ、螺溪の義寂の門下で有つたと云ふ。義寂は道邃六代の法孫で、その示寂の年は、宋の太宗雍熙四年（我一條帝永延元年）とある。卽ち我が慈惠僧正良源と同代の人になる。所がまた恰度その四年前（太平興國八年）宋高僧傳の著者贊寧が、この澄彧の註に序文を書いてゐる。それでこの「註十疑論」も、はつきりとは解からぬが、多分その頃に書かれたもので、或は贊寧の序と同年では無かつたかとも思ふ。

要するに「十疑論」は、若しそれが天台の著作であるとすれば、隋の初（我推古朝）に出來て唐の中頃（平安初期）に我國に將來された譯であるが、この「註十疑論」は、宋の初（平安中期）に出來て、その末年（鎌倉初期）に我國で開版されてゐるといふことになる。但し何人が將來したものかは、はつきりと解らない。

六

最後に、この古版本の書史學的價値に就て一言して置こう。我國の印刷術は、古く奈良朝時代例の百萬塔の陀羅尼に起原してゐることは言ふ迄もないが、次いで平安朝になつて、その代表的古版本として現に今ま正倉院の御物となつてゐる寛治版成唯識が有る。夫れから鎌倉時代にはいるので有るが、鎌倉時代になつては、建仁版（成唯識論）承元版（往生要集）等一二のものを除けば、次にこの建曆版がくる。兎も角この建曆版は、極小冊子ではあるが、年代も頗る古く、保存も可なり完然に、刊記も又明らかで、且つ淨土敎關係のものたる點に於て、我國古版史上頗る珍重すべきものゝ一つで有ることは、何人も異論あるまいと思ふ。（昭和三年十月一日於宗義研究會解說）